

## 学校配置研究会「幼保の在り方部会」報告書

### 1 研究会設置の趣旨

新城市には幼稚園2園，保育園20園がある。ここに通園する1440余名の子どもたちがそのような幼児教育を受けることが望ましいの調査研究を行う

### 2 研究期間と会議開催日程

第1回(3/2)情報交換	・作手保育園統合の経緯と幼稚園の現状
第2回(3/26)情報交換	・少人数保育の「メリット，デメリット
第3回(5/9)審議	・幼保交流，適切な保育園の統合，配置
第4回(7/10)公聴会 審議	・母の会代表の話(東郷西，作手，川合) ・保護者アンケートの実施検討
第5回(8/2)学習会 審議	・認定こども園について ・保護者アンケート内容検討
第6回(11/12)審議	・保護者意識調査の結果検討

### 3 委員

委員長	森下 俣明(社会教育指導員・生涯学習課子育て支援)
委員	加藤 節子(海老小学校教頭)
	大谷 啓子(八名保育園長)
	太田 勝博(児童課課長)
	古市 幸子(児童課・指導保育士)
	荻野 和代(庶務課主任・書記)
	加藤 由美子(学校教育課・事務局)

### 4 研究内容の報告

#### 保育のための適正人数

・年少児は集団を意識して遊ぶことが少ないが，年中児からは友達と多く関わって遊ぶようになる。特に，年長児は集団でのルールやコミュニケーションのとり方を学ぶためには，同年齢の子ども的人数がある程度確保されていなくてはならない。このことは保護者の意識と一致した形で表れている。

年長児	15人から20人
年中児	10人から19人
年少児	10人から14人

(園児の人間関係，特別な事情や保育士の力量等は考慮せず，一律の条件であるという前提のもとでの適正人数である)

保育形態，保育内容

- ・就学後，学校不適應の「小1プロブレム」が心配される今日，集団遊びの中で人とどう関わって行くかを学ぶことは今後ますます大切になってくる。また，自由保育を「子ども任せ」と捉えるのではなく，園児各自が集団遊びの中で課題に向かって努力できる場面を意図的に設定することが必要である。
- ・自然の中で身体を使っての体験的活動だけでなく，知的な面，情緒的な面を伸ばす活動など，バランスのよい保育内容が望ましい。

保育時間

- ・6時間から8時間が適切であり，年齢と保育時間は比例させるのがよい。
- ・現在7時までの延長保育を7園で受け入れているが，やむをえない家庭の子どもに対する措置である。保護者の都合で長い保育を受けることがないようにしたい。

その他

- ・小学校と違って，保護者の仕事場の関係で送迎に便利な園を選ぶこともある。また，就学近くになって幼稚園から地元の保育園へ転園する例もある。様々な選択肢の中で通園させられる現在のシステムはよい。
- ・園を保護者の選択に任せているので，人数の少ない園は敬遠され，淘汰されていく可能性はある。(来年度は3園が統合される)

## 5 今後の課題

- ・幼保一元化をにらんで，「認定こども園」について調査研究していく必要がある。
- ・「認定こども園」は，幼稚園型，保育所型，地方裁量型，幼保連携型と4種類あるが，新都市では現在の施設の中に組み込む「連携型」が現実的ではないか。

## 6 参考(別添)

保護者アンケート調査研究集計結果(幼・保部会)